

# 佐倉印西線(社会資本整備総合交付金) 埋蔵文化財調査報告書 4

— 佐倉市六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡 —

平成23年3月

千葉県県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 佐倉印西線(社会資本整備総合交付金) 埋蔵文化財調査報告書 4

さくら ひつごき きふねだい ひつごきそとで  
— 佐倉市六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡 —



## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県教育振興財団調査報告第662集として、佐倉印西線社会資本整備交付金（交通安全）事業に伴って実施した佐倉市六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺構・遺物が検出され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理事長 赤羽 良明

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による佐倉印西線社会資本整備交付金（交通安全）委託（埋蔵文化財調査）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県佐倉市石川字春地290-4ほかに所在する六崎貴船台遺跡（遺跡コード212-046）、佐倉市六崎字外出1047-1Aほかに所在する六崎外出遺跡（遺跡コード212-047）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員木原高弘が担当した。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000迅速測図「佐倉」（明治15年測量）
  - 第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」、「酒々井」
  - 第3図 佐倉市発行 1/2,500佐倉市基本図（E-5、E-6、F-5、F-6）
- 7 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量については、日本測地系に基づいている。
- 8 第5図に使用した第4次調査区全測図は（財）印旛都市文化財センター「六崎貴船台（4次・5次）遺跡発掘調査報告書」1995所収の挿図より転載した。
- 9 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 10 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県印旛地域整備センター、佐倉市教育委員会の御指導・御協力を得た。

# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡の位置と環境	2
1	遺跡の位置と周辺の地形	2
2	周辺の遺跡	3
3	過去に行われた発掘調査の概要	4
第2章	六崎貫船台遺跡（平成15年度調査地点）	7
第1節	調査の概要	7
第2節	縄文時代	7
1	土坑	7
2	陥穴	13
3	遺構外出土土器	14
第3節	中・近世	15
1	I区の遺構群	15
2	II区の遺構群	18
3	III区の遺構群	20
4	遺構外出土遺物	23
第3章	六崎貫船台遺跡（平成17年度調査地点）	24
第1節	調査の概要	24
第4章	六崎外出遺跡	26
第1節	調査の概要	26
第2節	縄文時代	26
1	炉穴	26
2	遺構外出土土器	29
第3節	古墳時代	30
1	道路状遺構	30
第4節	中世	31
1	掘立柱建物跡	31
第5章	まとめ	34
第1節	六崎貫船台遺跡	34
第2節	六崎外出遺跡	34

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置と地形……………	2	第13図	Ⅱ区の遺構群……………	19
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	3	第14図	Ⅲ-①・②区の遺構群……………	21
第3図	六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡調査地点 ……………	6	第15図	中・近世土坑……………	22
第4図	グリッド名称例……………	7	第16図	中・近世出土遺物……………	23
第5図	六崎貴船台遺跡（平成15年度調査地点） 検出遺構……………	8	第17図	六崎貴船台遺跡（平成17年度調査地点） 下層確認グリッド配置・土層断面図……………	25
第6図	六崎貴船台遺跡（平成15年度調査地点） 下層確認グリッド配置・土層断面図……………	9	第18図	グリッド名称例……………	26
第7図	SK001（1）……………	11	第19図	六崎外出遺跡検出遺構……………	27
第8図	SK001（2）……………	12	第20図	六崎外出遺跡下層確認グリッド配置・ 土層断面図……………	28
第9図	SK010……………	13	第21図	SK001・SK002・SK003……………	29
第10図	SK008・SK015……………	14	第22図	出土土器……………	29
第11図	遺構外出土土器……………	14	第23図	SD001……………	30
第12図	I区の遺構群……………	16	第24図	南側の遺構群……………	32
			第25図	北側の遺構群……………	33

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧……………	4	第3表	六崎外出遺跡調査概要……………	5
第2表	六崎貴船台遺跡調査概要……………	5			

## 図版目次

- 図版1 六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡周辺航空写真 SD004、SD005
- 図版2 I区調査前、II区調査前、I区調査風景、II区調査風景、I区下層確認グリッド、II区下層確認グリッド、III区下層確認グリッド、III-①区下層確認グリッド土層断面 図版8 SK001出土土器
- 図版3 I-①区、I-②区、I-③区 図版9 SK001出土石器、SK010出土土器、SK010出土石器、SK015出土土器、遺構外出土縄文土器、中・近世土器・瓦・陶器、中世銭貨
- 図版4 II-①区、III-②区、III-③区 図版10 調査区北側、調査区南側、下層確認グリッドFSPA-A'、下層確認グリッドSPD-D'
- 図版5 SB001・SA001、SB002、SB002土層断面 SX001、SX003、SK001、SK001土層断面 図版11 南側の遺構群、北側の遺構群、調査区全景、SB001・SB002
- 図版6 SK002、SK003、SK004、SK005・SK006、SX002・SK007、SK007土層断面、SK008・SK009、SK010 図版12 SB003、SB004、SB005、SK001、SK002、SK003、SD001、下層確認グリッド
- 図版7 SK010・SD005土層断面、SK011、SK012、SK015・SD008、SK013・SK014、SD002、
- 図版13 縄文土器、古墳時代土器

## 六 目 次

目次  
1 研究の背景と目的  
2 調査の経緯  
3 調査区概況  
4 調査方法  
5 調査結果  
6 結論

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯

千葉県県土整備部は、佐倉市石川及び六崎において県道65号佐倉印西線の歩道拡幅工事を計画し、千葉県教育委員会に照会したところ、千葉県教育庁教育振興部文化財課は、事業範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地である六崎貴船台遺跡及び六崎外出遺跡の一部に含まれる旨回答した。この埋蔵文化財の取扱いについて文化財課との協議の結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、六崎貴船台遺跡が2か所、六崎外出遺跡が1か所であり、六崎貴船台遺跡は平成15年度と平成17年度に各1地点、六崎外出遺跡は平成20年度に発掘調査を行った。発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、以下のとおりである。

### (1) 発掘調査

#### 平成15年度

遺跡名 六崎貴船台遺跡

期 間 平成15年10月1日～平成15年10月24日

所在地 佐倉市石川字春地290-4、290-5、290-7、290-8

組 織 調査部長 齋木 勝、北部調査事務所長 古内 茂、上席研究員 香取正彦

内 容 上層本調査219㎡、下層確認調査9㎡（調査対象面積 450㎡）

#### 平成17年度

遺跡名 六崎貴船台遺跡

期 間 平成17年7月5日～平成17年7月13日

所在地 佐倉市石川字春地296-1ほか

組 織 調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内 茂、上席研究員 木原高弘

内 容 下層確認調査16㎡（調査対象面積 271㎡）

#### 平成20年度

遺跡名 六崎外出遺跡

期 間 平成20年6月2日～平成20年6月10日

所在地 佐倉市六崎字外出1047-1Aほか

組 織 調査研究部長 大原正義、北部調査事務所長 豊田佳伸、上席研究員 土屋潤一郎

内 容 上層確認調査36㎡、上層本調査300㎡、下層確認調査16㎡（調査対象面積 375㎡）

### (2) 整理作業

#### 平成17年度

遺跡名 六崎貴船台遺跡

期 間 平成17年7月14日～平成17年7月29日

内 容 水洗・注記から実測の一部まで



組織 調査部長 矢戸三男、北部調査事務所長 古内 茂、上席研究員 木原高弘  
平成22年度

遺跡名 六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡

期間 平成22年11月1日～平成23年1月31日

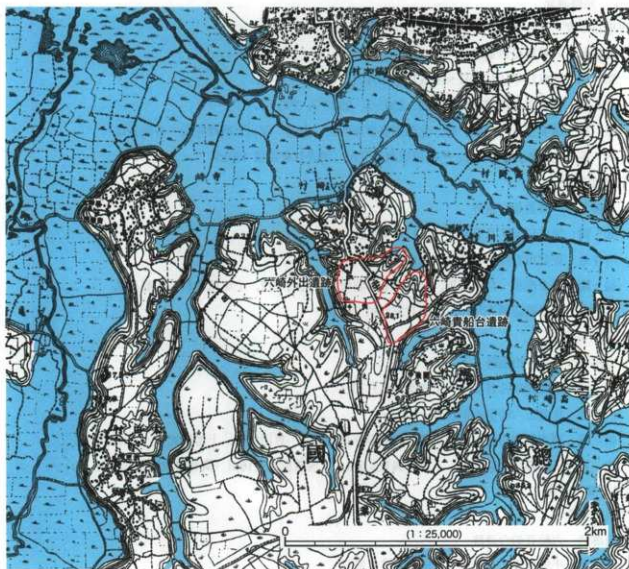
内容 水洗・注記から報告書刊行まで

組織 調査研究部長 及川淳一、北部調査事務所長 野口行雄、上席研究員 木原高弘

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と周辺の地形（第1図、図版1）

六崎貴船台遺跡、六崎外出遺跡は下総台地の中央部、印旛沼に南側から流入する鹿島川と高崎川に挟まれた台地の北東端に位置する。JR佐倉駅から南東に1kmほどの距離である。周辺は昭和50年代後半以降市街化が進み、往時の景観をイメージすることは難しくなっているが、北側からは高崎川、東側からは高崎川の支流である南部川の支谷が入り込んでおり、平坦面がいくつかに分断されている。両遺跡はそのう

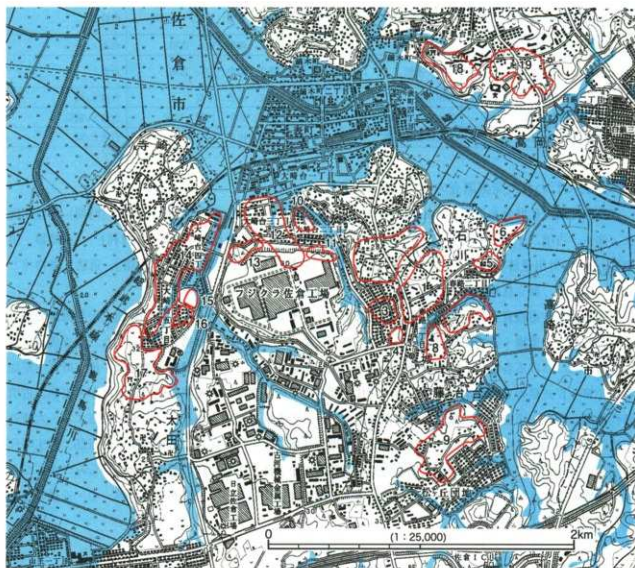


第1図 遺跡の位置と地形

ちの南北に隣接する標高約29m～30mの台地上に立地する。遺跡のおおよその範囲は、六崎貴船台遺跡が東西約300m、南北約450m、六崎外出遺跡が東西約450m、南北約300mである。今回報告する調査地点は、六崎貴船台遺跡は遺跡の西側、六崎外出遺跡は遺跡の南東側にそれぞれ位置する。

## 2 周辺の遺跡（第2図、第1表）

第1表には周辺遺跡の種別・時代などを示した。これらのうち発掘調査された主な遺跡として、南部川西岸域では、弥生時代後期の竪穴住居、中世の土坑墓などが検出された石川阿ら地遺跡（5）、15世紀から16世紀の単郭構造の城館跡であり、土塁・空堀、大型の掘立柱建物群、地下式坑などが検出された石川館跡（6）、弥生時代後期及び奈良・平安時代の竪穴住居、中世の土坑墓などが検出された城番塚遺跡（8）、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群が検出された城次郎丸遺跡（9）などが挙げられる。高崎川南岸及び鹿島川東岸域では、弥生時代中期後半の環濠集落として著名な六崎大崎台B・C地区遺跡（12）、弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期の竪穴住居群が検出された寺崎向原遺跡（14）、縄文時代中期加曾利EⅡ～Ⅲ式期の竪穴住居、弥生時代中期の方形周溝墓が検出された寺崎一本松遺跡（16）、縄文時代中期の竪穴住居・土坑、弥生時代中期後半の竪穴住居が検出された太田用替遺跡（17）などが挙げられる。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧

	遺跡名	所在地	種別	時代	立地/現状
1	六崎貴船台遺跡	石川春地	集落跡	縄文、弥生、古墳、平安、中世	台地上/畑
2	六崎外出遺跡	六崎外出・小山崎・貴舟台	集落跡	縄文、弥生、古墳、中世	台地上/畑
3	六崎井戸作遺跡	六崎井戸作・石川奥行台	集落跡	縄文、弥生、古墳	台地上
4	石川奥行台遺跡	石川奥行台	包蔵地	縄文(中・後)	台地上/畑
5	石川阿ら地遺跡	石川阿良地	集落跡 城館跡	旧石器、縄文、弥生、古墳、中近世	台地上/山林、畑
6	石川館跡	石川馬場口	城館跡 包蔵地	古墳、中近世	段丘上/宅地、山林、畑
7	城城跡	城城	城館跡	中近世	台地上/山林、畑
8	城香塚遺跡	城香塚・城城	集落跡	弥生、古墳(後)、奈良・平安、中近世	台地上/斜面、畑
9	城次郎九遺跡	城次郎丸	集落跡	縄文(早～後)、弥生(後)、奈良・平安、中近世	台地上/山林、宅地
10	棒作遺跡	六崎棒作	集落跡	縄文(前～晩)、弥生、古墳、平安	台地上/宅地
11	若宮台遺跡	大崎若葉台	集落跡	縄文、弥生、古墳、平安	台地上
12	六崎大崎台B・C地区遺跡	六崎大崎台	集落跡	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	台地上
13	六崎大崎台遺跡	六崎大崎台	集落跡	弥生、古墳、平安	台地上
14	寺崎向原A・B・C地区遺跡	寺崎向原・駒返・城堀	集落跡 古墳	縄文、弥生、平安、中近世	台地上
15	寺崎一本松B地区遺跡	寺崎一本松	包蔵地	縄文、弥生(中)、古墳	台地上
16	寺崎一本松遺跡	寺崎一本松	集落跡 古墳	縄文、弥生(中)、古墳	台地上
17	太田用替遺跡	太田用替	包蔵地	縄文、古墳、平安	台地上/畑
18	鍋木源坊尾余遺跡	鍋木町字源坊尾余	集落跡	縄文、弥生、古墳、平安	台地上/病院
19	大蛇要行寺脇遺跡	大蛇町要行寺脇	集落跡	古墳(後)	台地上/畑

### 3 過去に行われた発掘調査の概要(第3図、第2・3表)

千葉県埋蔵文化財分布地図<sup>1)</sup>によれば、六崎貴船台遺跡は種別として「集落跡」、時代(時期)等は「縄文、弥生、古墳、平安、中世」、遺構・遺物等として「住居跡・縄文土器(関山・加曾利E)、土師器、須恵器」、六崎外出遺跡は種別として「集落跡」、時代(時期)等は「縄文、弥生、古墳」、遺構・遺物等として「住居跡、掘立柱建物跡・石器、縄文土器・土師器」と記載されている。

両遺跡は佐倉市教育委員会及び(財)印旛都市文化財センターにより、過去に10数地点の発掘調査が行われ、各時代の遺構・遺物が検出されている。概要は第2・3表、位置は第3図に示した。調査成果に基づき遺跡内における各時代・時期の遺構の占地の傾向を相推すると、六崎貴船台遺跡は、縄文時代中期加曾利EⅢ～Ⅳ式期の土坑群が南西部、弥生時代中期の方形周溝墓群、同後期の竪穴住居群が中央部、古墳時代後期、奈良・平安時代の竪穴住居が南部、中・近世の遺構群が調査地点ほぼ全域に分布する。六崎外出遺跡は、縄文時代中期阿玉台Ⅳ～加曾利EⅡ式期の住居跡・土坑群からなる環状集落が東部、弥生時代中期の竪穴住居群が南部、同中・後期の方形周溝墓群が中央部、古墳時代の遺構は全域からみつかり、前期の竪穴住居群が中央部から北東部、中・後期の竪穴住居群が中央部から南西部、中・近世の遺構群が東部に分布する。

注1 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1) - 東葛飾・印旛地区(改定版) -」千葉県教育委員会 1997

第2表 六崎貴船台遺跡調査概要

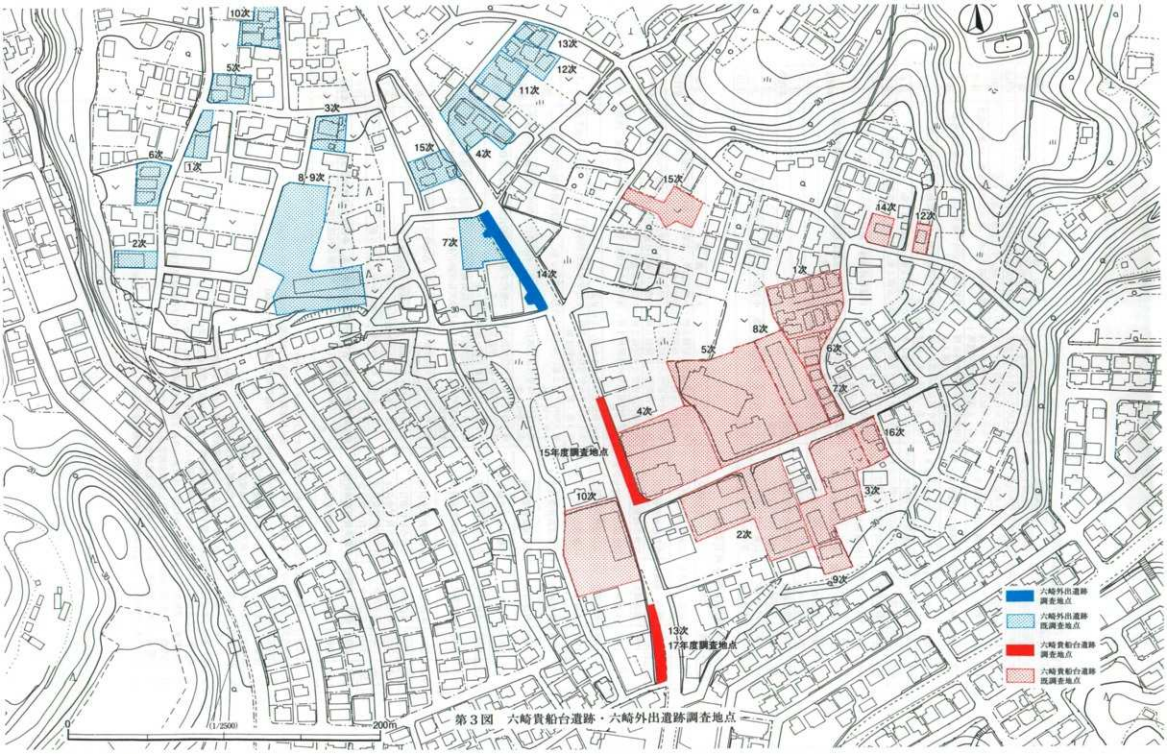
次数	年度	調査種別	実施機関	主な遺構	文献
1次	1988	本調査	印旛郡市文化財センター	弥生中期方形周溝墓14基・後期壱穴住居跡6軒、中近世溝状遺構2条	注1
2次	1992	確認・本調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期小竪穴20基、古墳時代後期壱穴住居跡2軒など	未報告
3次	1992	確認・本調査	佐倉市教育委員会	弥生時代後期壱穴住居跡2軒・土坑1基、中近世溝状遺構1条	未報告
4次	1993	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	中近世掘立柱建物跡8棟・台地整形区画2か所・井戸状遺構3基・火葬土坑2基・土坑21基・溝状遺構4条	注2
5次	1994	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	中近世掘立柱建物跡6棟・台地整形区画1か所・地下式土坑5基・火葬土坑6基・土坑35基・溝状遺構4条	注2
6次	1998	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	弥生中期方形周溝墓3基・後期壱穴住居跡1軒、中近世掘立柱建物跡1棟・土坑3基・櫓列1条・溝状遺構1条	注3
7次	1998	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	弥生中期方形周溝墓1基、中近世土坑1基、溝状遺構4条	注4
8次	2000	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	弥生中期方形周溝墓2基・後期住居跡1軒、中近世土坑5基・溝状遺構4条	注5
9次	2000	確認調査	佐倉市教育委員会	奈良・平安時代住居跡1軒	未報告
10次	2001	確認・本調査	印旛郡市文化財センター	縄文時代土坑14基、中近世掘立柱建物跡5棟・櫓列3条・井戸跡1基・土坑18基・溝状遺構5条	注6
—	2003	確認・本調査	千葉県文化財センター	縄文時代中期土坑2基・陥穴2基、中近世掘立柱建物跡2棟・台地整形区画3か所・土坑12基・溝状遺構8条・櫓列1条	本報告
11次	2005	確認調査	佐倉市教育委員会	中世溝状遺構1条・台地整形区画1か所	未報告
12次	2005	確認調査	佐倉市教育委員会	遺構なし	未報告
13次	2006	確認調査	千葉県教育振興財団	遺構なし	注7
14次	2006	確認調査	佐倉市教育委員会	遺構なし	注8
15次	2007	確認調査	佐倉市教育委員会	中世土坑4基・溝状遺構3基、中近世土坑8基、近世土坑3基	注9
16次	2008	確認調査	佐倉市教育委員会	遺構なし	注10

第3表 六崎外出遺跡調査概要

次数	年度	調査種別	実施機関	主な遺構	文献
1次	1993	確認・本調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期壱穴住居跡6軒・小竪穴23基、古墳時代前期壱穴住居跡2軒・中期壱穴住居跡11軒・後期壱穴住居跡1軒	未報告
2次	1994	確認・本調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期壱穴住居跡4軒・小竪穴13基・土坑22基、古墳時代中期壱穴住居跡1軒・後期壱穴住居跡5軒、古墳時代掘立柱建物跡2棟	未報告
3次	1998	確認調査	佐倉市教育委員会	古墳時代後期壱穴住居跡3軒、中世溝状遺構1条	注11
	1999	本調査	印旛郡市文化財センター	古墳時代前期壱穴住居跡1軒・後期壱穴住居跡2軒、時期不明土坑6基、溝状遺構1条	
4次	1999	確認調査	佐倉市教育委員会	中世台地整形区画1か所、土坑9基	注12
	1999	本調査	印旛郡市文化財センター	弥生時代後期壱穴住居跡1軒、中近世台地整形区画1か所、土坑11基、地下式土坑3基・掘立柱建物跡4棟	
5次	1999	確認調査	佐倉市教育委員会	縄文時代土坑2基、弥生時代方形周溝墓2基、古墳時代前期壱穴住居跡3軒、中世土坑1基	注11
	2000	確認調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期壱穴住居跡13軒・土坑9基、古墳時代中期壱穴住居跡4軒、近世溝状遺構1条	
6次	2001	確認調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期壱穴住居跡3軒・小竪穴7基、古墳時代中期壱穴住居跡1軒・後期壱穴住居跡5軒、中近世土坑1基	未報告
	2001	本調査	印旛郡市文化財センター	縄文時代中期壱穴住居跡3軒・小竪穴7基、古墳時代中期壱穴住居跡1軒・後期壱穴住居跡5軒、中近世土坑1基	
7次	2003	確認調査	佐倉市教育委員会	中世掘立柱建物跡4棟・溝状遺構1条	未報告
8次	2004	確認調査	佐倉市教育委員会	縄文時代中期壱穴住居跡11軒・土坑34基、弥生時代中期壱穴住居跡1軒、古墳時代中期壱穴住居跡4軒・後期壱穴住居跡15軒・土坑9基、中近世土坑12基・溝状遺構8条	注13
9次	2004	本調査	佐倉市教育委員会	弥生時代中期壱穴住居跡1軒・土坑1基、古墳時代中期壱穴住居跡1軒・土坑2基、中近世溝状遺構6条	注13
10次	2004	確認調査	佐倉市教育委員会	古墳時代初期壱穴住居跡1軒・中期壱穴住居跡1軒	注13
11次	2005	確認調査	佐倉市教育委員会	中世溝状遺構1条・台地整形区画1か所	注7
12次	2005	確認調査	佐倉市教育委員会	中世溝状遺構1条・台地整形区画1か所・土坑3基	注7
13次	2005	確認調査	佐倉市教育委員会	土坑2基	注7
14次	2008	確認・本調査	千葉県教育振興財団	縄文時代炉穴3基、古墳時代道路伏遺構1条、中世掘立柱建物跡5棟	本報告
15次	2008	確認調査	佐倉市教育委員会	古墳時代壱穴住居跡1軒・土坑1基、中世掘立柱建物跡1棟・土坑3基・柱穴11基	注10

- 注1 大澤孝「六崎貴船台遺跡発掘調査報告書」印旛郡市文化財センター 1989  
 2 渋谷芳則、小牧美加枝「六崎貴船台（第4・5次）遺跡発掘調査報告書」印旛郡市文化財センター 1995  
 3 「財団法人印旛郡市文化財センター年報15・平成10年度」印旛郡市文化財センター 2000  
 4 宮文子「六崎貴船台遺跡（第7次）」印旛郡市文化財センター 1999  
 5 高橋誠「六崎貴船台遺跡（第8次）」印旛郡市文化財センター 2001  
 6 中山俊之「六崎貴船台遺跡（第10次）」印旛郡市文化財センター 2002  
 7 小倉和重「平成16・17年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」佐倉市教育委員会 2007  
 8 喜多智明「平成18年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」佐倉市教育委員会 2008  
 9 近江哲「平成19年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」佐倉市教育委員会 2009  
 10 小倉和重、猪股佳二、日暮冬樹「平成20年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」佐倉市教育委員会 2010  
 11 竹内順一「六崎外出遺跡（第3・5次）」佐倉市教育委員会 2004  
 12 高橋誠「六崎外出遺跡（第4次）」印旛郡市文化財センター 2001  
 13 天本昌希、猪股佳二「平成16年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書」佐倉市教育委員会 2006





第3図 六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡調査地点

- 六崎外出遺跡 調査地点
- 六崎外出遺跡 既調査地点
- 六崎貴船台遺跡 調査地点
- 六崎貴船台遺跡 既調査地点

## 第2章 六崎貴船台遺跡（平成15年度調査地点）

### 第1節 調査の概要（第4～6図、図版2）

調査地点は六崎貴船台遺跡の西側に位置する。県道佐倉印西線の車道部東側に沿った幅約5m～13m、長さ約77mの範囲である。対象地は印旛都市文化財センターによって平成5・6年度に行われた第4次調査地点の西側に隣接し、遺構が検出されることが予想されたため、上層については確認調査を行わず、安全帯として確保した車道に接する西側幅約2m及び店舗への進入路などを除いた219㎡を本調査範囲とした。そのため本調査範囲は大きく3区に分かれ、南側からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼称した。また各区内は調査の進捗に応じて、Ⅰ区は①～③、Ⅱ区は①～②、Ⅲ区は①～③に適宜細分した。

検出された上層の遺構は、縄文時代の土坑2基・陥穴2基、中・近世の掘立柱建物跡2棟・台地整形区画3か所・土坑12基・溝状遺構8条・櫓列1条である。歩道幅の細長い調査範囲であったため、部分的な調査に留まり全容が明らかとなった遺構は少ない。なお、調査段階で平安時代の堅穴住居跡とされたSI001・SI002、中・近世の土坑SK010については、整理段階で検討した結果、SI001は遺構ではなく、SI002は中・近世の土坑、SK010は縄文時代の土坑と判断するに至った。そのためSI001は欠番扱いとし、遺構種別が変更となるSI002については、SK016（SI002）として報告する。また、調査区内からは古墳時代前・中期の土器片が少量出土したが、いずれも遺構に伴うものでなく小破片であるため、掲載を割愛した。

下層については、グリッドを4か所設定して確認調査を行ったが、遺物が出土しなかったため本調査は実施しなかった。

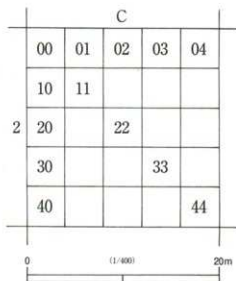
調査にあたっては、調査対象地が細長いことから方眼網は設定せず、調査区内の任意の位置4か所に旧公共座標に則った基準点を打設し遺構実測などに使用した。その後平成17年度調査時に事業地にかかる遺跡範囲全体を覆うように方眼網を設定したことから、平成15年度調査地点についても遺構の位置などはこの方眼網に従い示すこととする。方眼網は20m×20mの区画を大グリッドとし、大グリッドの呼称法は、基点を0Aとし、南へは算用数字、東へはアルファベットを付し、これを組み合わせて大グリッド名とした。大グリッドの中はさらに4m×4mごとに25個の小グリッドに分割し、北西隅を基点に東へ00、01、02……04まで、一行南は10、11、12……14と進み、南東隅を44とした。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、2C-33のように表示した（第4図）。当該調査地点の範囲はB、C、Dの3列、1、2、3、4の4行にかかる。

### 第2節 縄文時代

#### 1 土坑

SK001（第7・8図、図版5・8・9）

Ⅲ-①区南端、3C-12に位置する。東側の一部は調査区域外



第4図 グリッド名称例



第5図 六崎貴船台遺跡(平成15年度調査地点)検出遺構

B

C

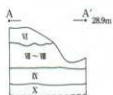
D

1

2

3

4



0 (1/60) 2m

- VI 黄褐色ハードローム
- VII 黄褐色ハードローム、硬質
- VIII 黄褐色ハードローム、硬質でやや粘性有
- X 暗褐色ハードローム、やや軟質で粘性有

0 (1/300) 15m

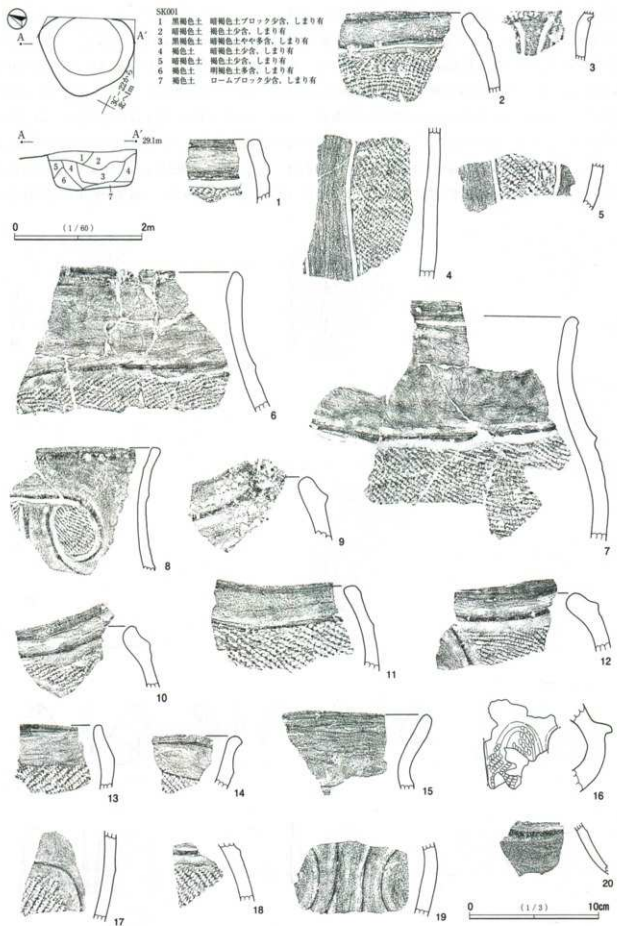
第6図 六崎貴船台遺跡（平成15年度調査地点）下層確認グリッド配置・土層断面図



に及んでおり調査することができなかった。平面形は方形に近い円形で、規模は長軸径1.55m、短軸径1.3m、深さ55cmを測る。断面形はタライ状で、底面は平坦である。上層は暗褐色土・黒褐色土、下層は褐色土を主体とし、いずれもしまりがあり、自然堆積状を呈する。

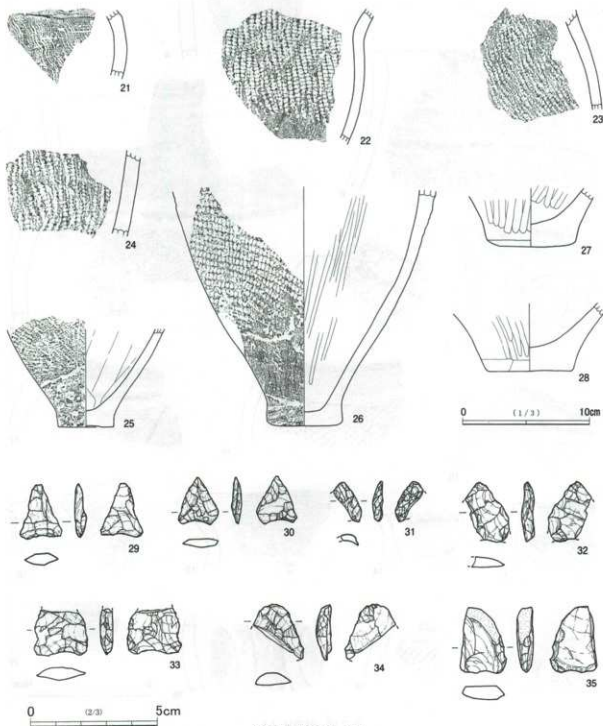
遺物は土器・石礫・石礫製作に伴う石器が中層にあたる3層を中心に出土したが、いずれも一括で取り上げられており、出土位置は不明である。1～5は中期加曾利EⅢ式土器である。1・2は内湾する口縁部片である。いずれも口縁部文様は沈線区画による無文帯、胴部文様は縄文である。3は口縁部付近の破片である。上方に列点文が施されており、口縁部無文帯を区画するものと考えられる。胴部文様は沈線区画による磨消懸垂文である。4・5は胴部片である。文様は縄文を地文とする沈線区画による磨消懸垂文である。6～21は加曾利EⅣ式土器である。6・7は大甕の口縁部から胴部にかけてである。膨らみをもった胴部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部文様は微隆起線区画による幅広い無文帯である。胴部文様は単節縄文である。8は外反しながら立ち上がる口縁部から胴部で、比較的薄手な作りである。口縁部文様帯は無文である。胴部文様は縄文を地文とする微隆起線区画による磨消渦巻文である。口縁部内面には微隆起線が一巡する。9・10は内湾する小波状の口縁部片である。9は波頂部に突起を有するものである。器表面は二次的な火熱を受けたためか虫食い状に剥落している。口縁部文様は微隆起線区画による無文帯である。胴部は遺存部分では文様がみられない。10の口縁部文様は微隆起線区画による無文帯、胴部文様は単節LR縄文である。11・12は内湾しながら立ち上がる口縁部片である。口縁部文様が微隆起線区画による無文帯であり、11の胴部文様は単節RL縄文、12の胴部文様は縄文を地文とし、微隆起線区画による磨消懸垂文が垂下している。13は内湾する口縁部片である。口縁部文様は区画されていない無文帯である。胴部文様は単節LR縄文が施されている。14は外反する口縁部片である。口縁部文様は区画されていない無文帯である。胴部文様は単節RL縄文が施されている。15は外傾する甕の口縁部片である。口縁部文様は微隆起線区画による幅広い無文帯である。16は橋状把手の破片である。把手部の上方は隆起線で区画され、それより下方には縄文が充填されている。17は胴部片である。文様は微隆起線区画による磨消懸垂文である。18は口縁部下と思われる胴部片で、微隆起線区画に単節RL縄文が施される。19は胴部片で、微隆起線による懸垂文が施される。20は内傾する胴部上方の破片で、微隆起線で区画された上下は無文帯である。21は胴部片で、微隆起線区画下に櫛歯状工具による条線文が蛇行状に描かれている。22～28は加曾利EⅢ～EⅣ式土器である。22～24は胴部片である。いずれも縄文が施される。25・26は胴部から底部である。25は底径4.2cmを測る。外面の底部周辺はヘラ状工具による縦方向のナデが施され、それより上は縄文が施される。内面は縦方向のケズリが施される。外面は二次的な火熱を受けたためか虫食い状の剥落が顕著である。26は底径6.0cmを測る。外面の底部周辺はヘラ状工具による縦方向のナデが施され、それより上は縄文が施される。内面は縦方向のミガキ調整が施される。27・28は底部周辺である。内外面ともミガキ調整が施される。

石器は、図示した石礫完成品4点・石礫未成品3点のほか、石礫製作に伴う剥片が多く出土した。剥片は微細なものが多いため全ての点数を数えることはできなかったが、石材としては黒曜石が最も多用されており、重量的には黒曜石54.8g、その他157gであった。剥片に石器の素材となるような形状・調整痕の認められるものはなかった。29～32は石礫完成品である。29は安山岩製である。二等辺三角形を呈し、長さ2.0cm、幅1.65cm、厚さ0.45cm、重量1.1gである。調整は全面にわたり行われ、縁辺は直線的である。礫先は調整されているが鋭さはない。装着部は僅かに窪むが、意識して調整された痕跡はみられない。

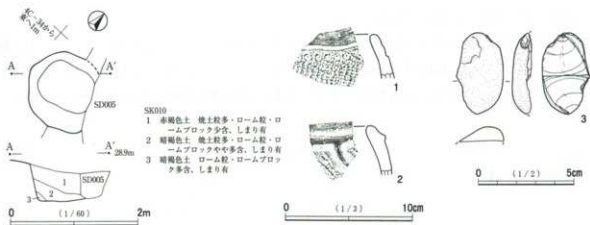


第7図 SK001 (1)

30・31は黒曜石製である。平面形状はいずれも正三角形に近く、側縁は直線的である。31は長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量0.7gである。側縁は直線的である。装着部の扱いは浅く、意識して作出された痕跡はみられない。31は片側縁から基部が欠損する。鎌先に鋭さはない。長さ1.55cm、幅1.1cm、厚さ4.0cm、重量0.3gである。32は流紋岩製である。片側縁から基部及びもう一方の基部先端が欠損する。正三角形形状を呈し、長さ2.3cm、厚さ0.5cm、重量1.5gである。装着部は僅かに窪む。鎌先に鋭さはない。33～35は石礫未成品である。33・34はチャート製である。33は先端部付近が欠損している。側縁及び基部の形状はいびつであり、周縁の調整途中で欠損したものと思われる。長さ1.8cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重量2.3gである。34は片側縁から基部が欠損している。素材剥片の剥離面が一部にみられ、鎌先の作出はなされてい



第8図 SK001 (2)



- SK010
- 1 赤褐色土 焼土粒多・ローム粒・ロームブロック少含、しまり有
  - 2 暗褐色土 焼土粒多・ローム粒・ロームブロックやや多含、しまり有
  - 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多含、しまり有

第9図 SK010

ない。遺存する側縁には微細な調整がみられ、調整途中で欠損したものと思われる。長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重量1.7gである。35は安山岩製で、原石面を有する剥片を素材とし、側縁及び基部を作出する調整が一部施されている。長さ2.6cm、幅1.85cm、厚さ0.62cm、重量3.7gである。

#### SK010 (第9図、図版6・7・9)

I-③区、4C-34に位置する。東側は中・近世の溝状遺構SD005に切られていた。平面形は確認面では不整形、底面は平坦で、東西方向に長い隅丸の長方形を呈する。規模は径約1.2m、深さ約60cmを測る。断面形はタライ状である。覆土中には焼土粒を多く含む。

出土遺物は少なく、図示した土器片2点、石器1点のほか古墳時代の土師器片が1点出土したのみであった。1・2は加曾利EⅢ式土器の内湾する口縁部片である。11は小波状を呈し、口縁部文様は沈線区画による幅状の無文帯である。胴部文様は縄文が施され、沈線下に一列の列点文が加えられている。2の口縁部文様は隆起線区画による幅状の無文帯、胴部文様は縄文を地文とする1本一組の隆起線文である。3はチャート製の楔形石器である。円礫から分割あるいは剥離された核片を素材とし、両極剥離を行っている。片面は自然面が残されている。長さ4.1cm、幅2.47cm、厚さ1.04cm、重量10.3gである。

#### 2 陥穴

##### SK008 (第10図、図版6)

Ⅲ-③区、1B-13・23に位置する。北・西側は調査区外に及んでいたため調査することができず、東側は中・近世の土坑SK009に切られていた。底面の形状及び断面形から南北方向に長い楕円形の陥穴と考えられる。推定規模は長軸1.8m、短軸1.4mとみられる。底面は短軸50cm、確認面からの深さ1.0mを測る。断面形は底面から逆「ハ」の字状に緩やかに開く播鉢状になる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

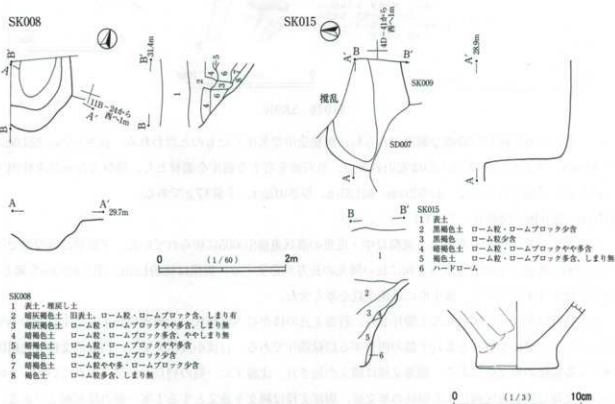
##### SK015 (第10図、図版7・9)

I-③区南端、4D-30・40に位置する。東西方向に長い陥穴と考えられ、東側は調査区外に及んでいたため調査できず、北側は掘乱により失われていた。また、南西側の上方は中・近世の溝状遺構SD007に切られていた。規模は短軸1.3m、深さ1.45mを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む土層が自然堆積していた。

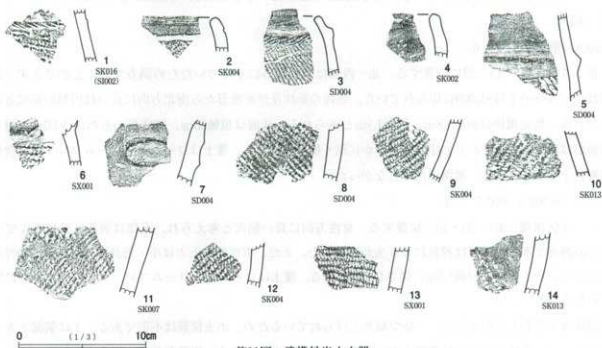
遺物は土器が1点出土した。一括で取り上げられているため、出土位置は不明である。1は胴部下方から底部で、外面はヘラズリ及びナデ、内面はヘラナデが施される。加曾利EⅢ～Ⅳ式土器である。

### 3 遺構外出土土器 (第11図、図版9)

遺構外出土遺物は、そのほとんどがI区の中・近世の遺構内から出土したものである。1は前期諸磯b式土器の胴部片である。単節R.L.縄文を地文に浮線文が加えられ、浮線文上には斜めのキザミが施される。2は加曾利EⅢ式土器の内弯する口縁部片である。口縁部文様は沈線区画による幅狭の無文帯である。胴



第10図 SK008・SK015



第11図 遺構外出土土器

部文様は縄文が施される。3～7は加曾利EⅣ式土器である。3・4は内弯する口縁部片である。3の口縁部文様は隆起線区画による無文帯である。胴部の文様は単節RL縄文で、胴部施文後に隆起線上に単節LR縄文が施されている。4の口縁部文様は無文帯である。5・6は内弯する口縁部下の破片で、口縁部文様は隆起線区画による無文帯、胴部文様は縄文である。7は胴部片で、微隆起線によって楕円形の胴部文様が施されている。8～14は加曾利EⅢ～Ⅳ式土器の胴部片で、8～13の文様は縄文である。14は縦方向のミガキ調整が加えられており、底部付近とみられる。

### 第3節 中・近世

#### 1 I区の遺構群(第12図、図版3)

最も南側に位置する調査区で、南北18m、幅は北端で2.6m、南側の交差点部分は東側にややカーブしており、最も幅の広い部分で3.8m前後である。表土は30cm～60cm堆積し、遺構検出面はハードルームで、標高28.7m～28.8mで、検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、台地整形区画1か所、土坑7基、溝状遺構4条のほかピット数基である。

#### SB002(第12図、図版5)

調査区南側4C-34に位置する。掘立柱建物跡である。南北方向に並ぶ2柱穴を検出したのみで、全体の規模は不明である。西側に位置するSK011が本跡を構成する柱穴となる可能性がある。柱間寸法は約1.8mを測り、主軸方向はN-13°-Eである。北側の柱穴の掘り方は不整形を呈し、径約80cm、深さ約30cmを測る。底面の北側には径約18cm、深さ12cmのピットがある。土層断面には中央付近に径約20cmを測る黒褐色土の柱痕が観察された。柱痕下にはしまりのないロームブロックが厚さ10cmほど堆積していた。掘り方埋土はローム粒・ロームブロックを多く含む褐色土・暗褐色土であった。南側の柱穴の掘り方は南側が調査区外に及んでおり、全掘することができなかった。最大径68cm、深さ36cmを測る。覆土は、上層はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土、下層はローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする。遺物はいずれの柱穴からも出土しなかった。

#### SX001(第12図、図版5)

調査区中央付近、4C-23に位置する浅い溝状の台地整形区画である。北・南壁はほぼ東西方向に向いている。規模は南北の長さ3.4m、深さ約20cmを測る。遺構内にSK005・SK006などの土坑、ピットがあり、土層断面の観察結果によれば、SK005は本跡より古い遺構と考えられる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。遺物はカワラケの小破片1点のほか縄文土器10数点、古墳時代の土器器片2点が出土した。

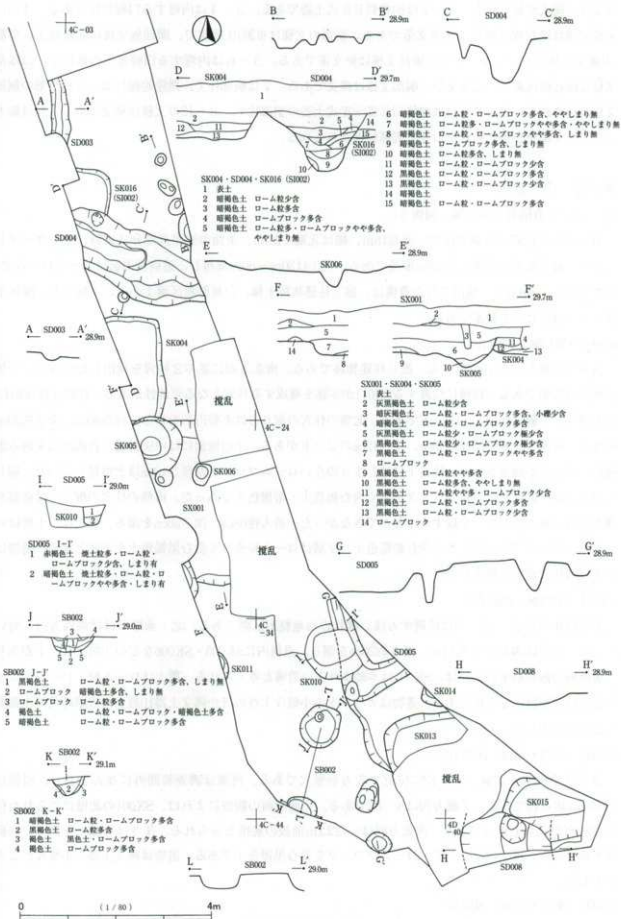
#### SK004(第12・15図、図版6)

調査区中央やや北側、4C-13に位置する方形竪穴である。西側は調査範囲外に及んでおり、南側はSX001に切られている。主軸方向はN-0°である。土層断面の観察によれば、SX001の北壁に切られた付近で底面が立ち上がっており、南北方向は一辺2.2m前後の規模とみられる。深さは約32cmを測り、底面は平坦である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土である。遺物は縄文土器の小破片が2点出土した。

#### SK005(第12・15図、図版6)

調査区中央、4C-23に位置する。西側は調査区外に及んでいる。上面はSX001に切られている。方形に





第12図 I区の遺構群

近い円形の土坑で、掘立柱建物跡の柱穴の掘り方の可能性がある。断面形は楕円状を呈する。径約1.6m、深さ50cmを測る。ローム粒を多く含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK006 (第12・15図、図版6)

調査区中央、4C-23に位置する長楕円形のピット状の土坑である。SX001との新旧関係は不明である。規模は長軸径60cm、短軸径35cm、深さ36cmを測る。遺物は出土しなかった。

SK011 (第12・15図、図版7)

調査区南側、4C-33に位置する。円形のピット状の土坑である。ほとんどが調査区外に及んでおり、東側のごく一部分を検出したのみである。前述したとおり、SB002を構成する柱穴となる可能性がある。推定径約80cmと考えられ、深さ最大25cmである。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土・黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK013 (第12・15・16図、図版7・9)

調査区南側、4C-34・44に位置する方形堅穴である。南・西側は攪乱されており、北西コーナー付近を中心とした部分を検出したのみである。主軸方向はN-10°-Wである。深さ15cm-18cmの段が北側から取り付いている。深さ55cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土である。

遺物は、カワラケ1点、銭貨1点のほか縄文土器が3点出土した。第16図1はカワラケの体部から底部片である。底径7.4cm、底部の厚さは約1.5cmを測る。底部外面は回転糸切り痕がみられる。胎土色は浅黄色を呈する。14世紀後半～15世紀前半代のものである。第16図6は北宋銭「皇宋通寶」(初鋳1039年)である。

SK014 (第12・15図、図版7)

調査区南側、4C-34に位置する。SK013より新しい。南西側コーナー付近の一部を検出した。深さ約30cmを測る。最下層に焼土・灰を含む炭化物が堆積しており、火葬施設の燃焼部の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SK016 (SI002) (第12・15図)

調査区北側、4C-03に位置する方形堅穴である。南側はSD004に切られていた。深さ約50cmを測る。覆土は暗褐色土で、下層はローム粒・ロームブロックを多量に含む。遺物は出土しなかった。

SD003 (第12図)

調査区北側、4B-93に位置する。南北方向に走る浅い溝状遺構である。南側は調査区外に及んでおり、北側は削平されていた。長軸方向はN-4°-Wである。最大幅42cm、深さ約18cmを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD004 (第12図、図版7)

調査区北側、4C-03・13に位置する。東西方向に走る溝状遺構である。西側・東側とも調査区外に及んでいるが、東側に隣接する第4次調査地点I区ではみつからない。SK016 (SI002) と重複し、本跡の方が新しい。長軸方向はN-70°-Wを指す。幅1.2m-1.4m、底面幅約20cm-40cm、深さ約1.2mを測り、断面形はV字状を呈し、南側面は検出面下15cm-18cmにテラス状の段を有する。底面は西側に向かってやや深く掘り込まれている。北及び南側面にピットがあるが、本跡に伴うものであるか不明である。覆土は暗褐色土を主体とし、下層はしまりが無いローム粒・ロームブロックを多く含むため、埋め戻された可



能性がある。遺物は縄文土器が10数点、古墳時代の土師器片が2点出土した。

#### SD005 (第12図、図版7)

調査区南端4C-24・34に位置する。溝状遺構である。ほぼ直角に屈曲する部分で、幅約50cm～70cm、深さ約40cmを測り、断面形は逆台状を呈する。南北方向はN-15°-W、東西方向はN-65°-Eを指している。覆土は焼土粒を多量に含む赤褐色土・暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。第4次調査地点Ⅰ区において本跡に連続すると考えられる1号溝状遺構が調査されており、東側はさらに約18.5m直線的に続いていることが判明している。

#### SD008 (第12図、図版7)

調査区南端4D-40に位置する。南北方向に延びる溝状遺構である。南側は調査区外、北側は掘乱などによりごく一部分しか調査できなかった。幅1.9m、深さ約40cmを測り、断面形は浅い播鉢状を呈する。底面には径50cm～60cm、深さ24cmのビットがある。遺物は出土しなかった。

#### 2 II 区の遺構群 (第13図、図版4)

中央に位置する調査区である。南北1.3m、東西1m前後の範囲である。遺構検出面の標高は29m前後である。検出された遺構は、台地整形区画1か所、土坑3基、溝状遺構1条、ビット数基である。そのほかに調査区中央付近に南北方向の10cmほどの浅い段差が東西両側に形成されており、台地整形区画の可能性が考えられたが、覆土は埋戻しと思われる山砂を含む層が主体であり、調査時に遺構として取り扱わなかった。

#### SX002 (第13図、図版6)

調査区北端2B-34・44、2C-31・41に位置する台地整形区画である。南側の一部を検出した。側面の方向はN-85°-Wを指している。底面はソフトロームの最下層に掘り込まれており、ほぼ平坦である。深さは20cmを測り、側面はゆるやかに立ち上がり、底面との境はあまり明瞭ではない。側面には長軸約30cm、深さ約23cmの方形のビットが1か所あり、本跡に伴うものである。覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。東側の第4次調査地点Ⅱ区からは本跡に連続すると考えられる1号台地整形区画が見つかっており、17mほど南東側に拡がっていることが判明している。西側については、本調査地点よりさらに北西側に及んでおり、東西方向を長軸とする約25mを測る大型の台地整形区画と考えられる。

#### SK002 (第13・15図、図版6)

調査区南端3C-11に位置する方形竪穴である。南西コーナーはSD001と重複する。主軸方位はN-7°-Wである。規模は、南北方向は約1.2m、東西方向は1.1m、深さ40cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。

#### SK003 (第13・15図、図版6)

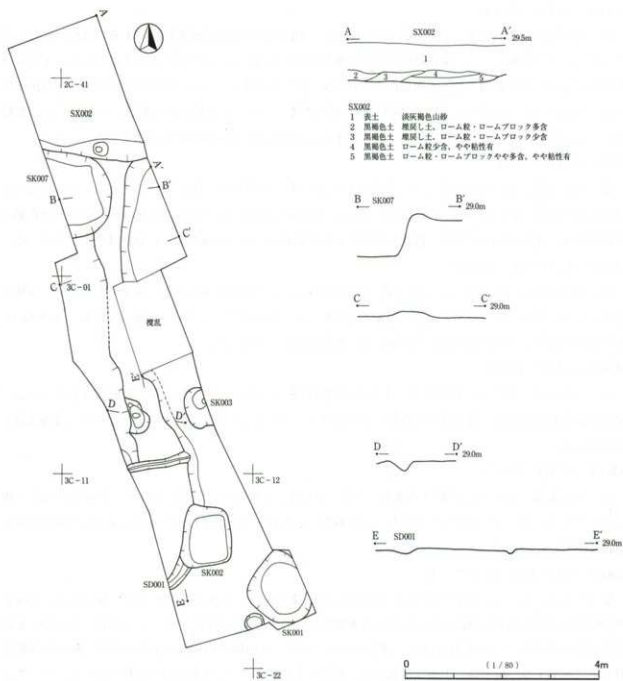
調査区中央部3C-01に位置するビット状の土坑である。東側1/3は調査区外に及んでいた。平面形は不整な楕円形、断面形は播鉢状を呈する。長軸径1.1m、深さ60cmを測る。覆土は、下層はローム粒・ロームブロックを多く含むしまりのない褐色土、上層は黒褐色土・暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

#### SK007 (第13・15図、図版6)

調査区北端2B-44・2C-41に位置する方形竪穴である。西側は調査区外に及んでおり、北側はSX002に

接している。東西に長い不整な隅丸長方形を呈するものとみられる。主軸方位はN-10°-Eである。規模は東側面で80cm弱、深さ最大90cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。覆土は、中層以下はローム粒・ロームブロックを多く含むしまりのない層が主体である。遺物は縄文土器が4点出土した。SD001 (第13図)

調査区南側3C-11に位置する。溝状遺構である。北側はSK002と重複し、南西方向は調査区外に及んでおり、長さ60cmほどを検出できたにすぎない。長軸方向はN-40°-Eである。最大幅32cm、深さ約15cmを測る。断面形は浅いU字形である。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。



第13図 II区の遺構群

### 3 III区の遺構群（第14図、図版4）

北側に位置する調査区である。南側から①～③の調査区は分断されている。Ⅲ-①区は南北約4.8m、東西約2.2m、Ⅲ-②区は南北12.8m、東西約2.4m、Ⅲ-③区は南北約1.2m、東西1.7mの範囲である。遺構検出面の標高は28.5m～29.0mである。検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、台地整形区画1か所、土坑2基、欄列1条、溝状遺構3条、ピット数基である。

#### SB001（第14図、図版5）

Ⅲ-②区北部、1B-44に位置する。東西方向に並ぶ掘立柱建物跡の柱穴の掘り方2基を検出した。西側の柱穴は東側の約1/2を調査できたにすぎない。柱間寸法は約1.5mである。東側の柱穴は長軸径約80cm、短軸径50cm、深さ約80cmを測る。西側の柱穴は最大径約40cm、深さ30cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### SX003（第14図、図版5）

Ⅲ-②区中央部、1B-44、1C-40、2B-04、2C-00に位置する台地整形区画である。北西側面の一部と南西コーナーを検出した。南西側面は南側の攪乱部分に位置していたと考えられることから、平面形は方形を呈するものと推測される。西側面の方向はN-15°-Eを指している。床面は平坦で、深さ約10cmを測る。南西コーナー付近のピットは本跡に伴う柱穴と考えられ、平面形は長方形で、長軸約1.0m、短軸40cm、深さ約40cmを測る。遺物は縄文土器片が1点、古墳時代の土師器片が1点出土した。

#### SB001（第14図、図版5）

Ⅲ-②区北部、1B-44に位置する。東西方向に並ぶ掘立柱建物跡の柱穴の掘り方2基を検出した。西側の柱穴は東側の約1/2を調査できたにすぎない。柱間寸法は約1.5mである。東側の柱穴は長軸径約80cm、短軸径50cm、深さ約80cmを測る。西側の柱穴は最大径約40cm、深さ30cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### SK012（第14・15図、図版5）

Ⅲ-②区中央部、2B-04・14、2C-00・10に位置する。長方形の土坑である。SD007と重複し、西側側面はわずかに調査区外に及んでいる。短軸方向はN-20°-Wを指している。長軸推定約1.5m、短軸68cm、深さ55cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。遺物は出土しなかった。

#### SK009（第14図、図版6）

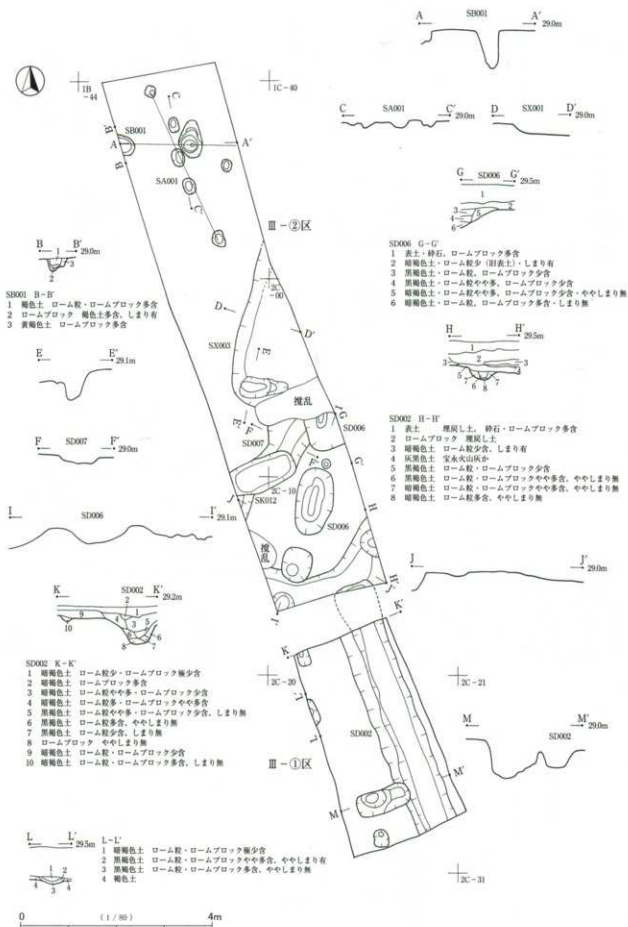
Ⅲ-③区東側、1B-13に位置する。土坑の南側壁付近の一部を検出したのみで平面形は不明である。深さは最大40cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

#### SA001（第14図、図版5）

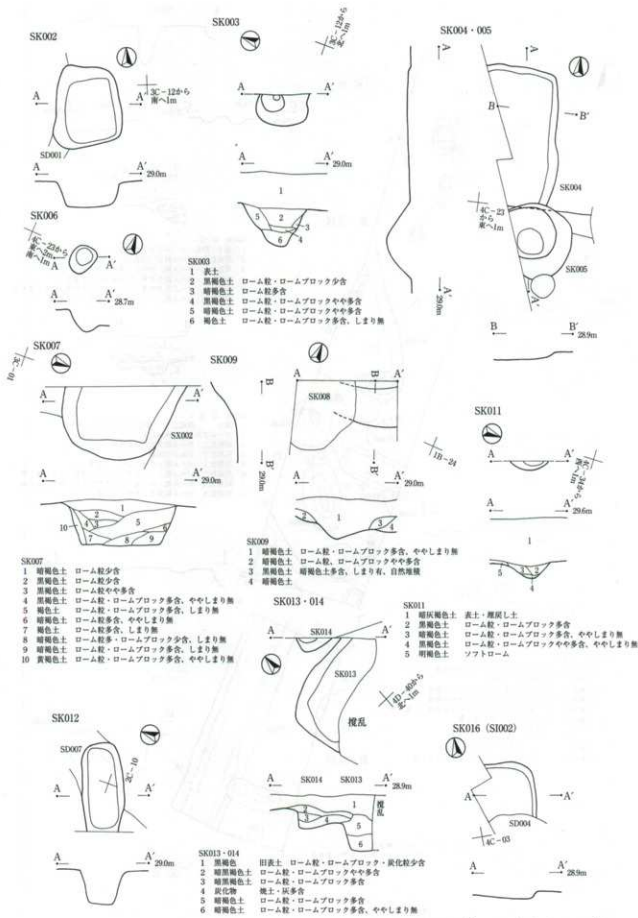
Ⅲ-②区北部、1B-44に位置する欄列である。SB001に南北方向に交差しており、方向はN-25°-Wに指している。検出されたピットは5基で、円形ないし方形を呈し、径12cm～38cm、深さ15cm前後である。遺物は出土しなかった。

#### SD002（第14・16図、図版7・9）

Ⅲ-①②区、2C-10・20に位置する。直線的に走る溝である。長軸方向はN-20°-Wである。北端東側の壁上端部分は調査区外に及んでいる。南西側に柱穴の掘り方と思われるピットが検出されたが、本跡に伴うものではない。推定幅約1.6m、深さ約60cmである。底面幅は約40cmで平坦である。断面形は幅広のV字状を呈する。覆土は、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土で、いずれもローム粒・ロームブロックを含むしまりの無い層である。北端部の北側に約20cm掘り下げられた段及びピットは調査時の所見では本跡



第14図 III-①・②区の遺構群



第15図 中・近世土坑

に伴うものと考えられたが、これらはSX002（第4次調査地点Ⅱ区1号台地整形区画）の北側面につながる可能性がある。

遺物は、中・近世の土器・瓦片のほか、縄文土器・土師器片が出土した。第16図2は焙烙の口縁部から胴部片である。口縁部はヨコナデで仕上げられる。胎土中には細かい雲母粒を含む。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。第16図3は連珠三巴文軒丸瓦である。周縁部は剥落している。巴文は左巻きで、尾が長く伸びて圏線となる。灰色を呈する。2・3とも17世紀後半から18世紀代のものである。

#### SD006（第14図）

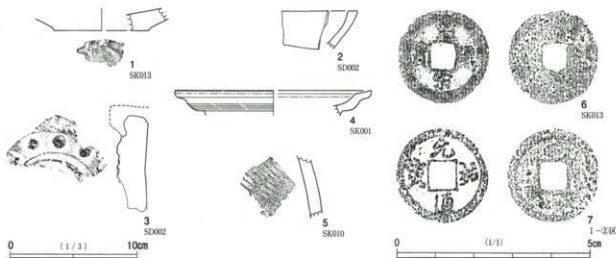
Ⅲ-②区、2C-00・10に位置する。南北方向に並ぶ4基の土坑であるが、本来は土坑列を伴う溝状遺構であったと考えられる。長軸方向はN-15°-Eを指している。土坑の平面形は方形、長楕円形など不統一である。北側から2穴目の土坑は長軸1.4m、短軸80cm、深さ40cmを測る。3穴目の方形の土坑は長軸70cm、短軸62cm、深さ約20cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土が主体であった。遺物は縄文土器片が1点出土した。

#### SD007（第14図）

Ⅲ-②区、2B-04、2C-00・10に位置する溝状遺構である。北側は攪乱されており、SX003との関係及び重複するSK012・SD006との新旧関係は不明である。長軸方向はN-30°-Eで、SK012の南西側は東側に振れている。最大幅約90cm、深さ約15cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 4 遺構外出土遺物（第16図、図版9）

4は縄文時代の土坑SK001から出土した古瀬戸陶器折縁皿である。口径15.4cmを測る。口縁部内外面に灰軸が施される。古瀬戸後期様式（14世紀後半）のものである。5は縄文時代の土坑SK010から出土した渥美窯産陶器甕の胴部片である。灰白色を呈し、外面に叩き目（押印文）が施される。7はⅠ-②区の遺構外から出土した北宋銭「元祐通寶」（初鑄1086年）である。



第16図 中・近世出土遺物

### 第3章 六崎貴船台遺跡（平成17年度調査地点）

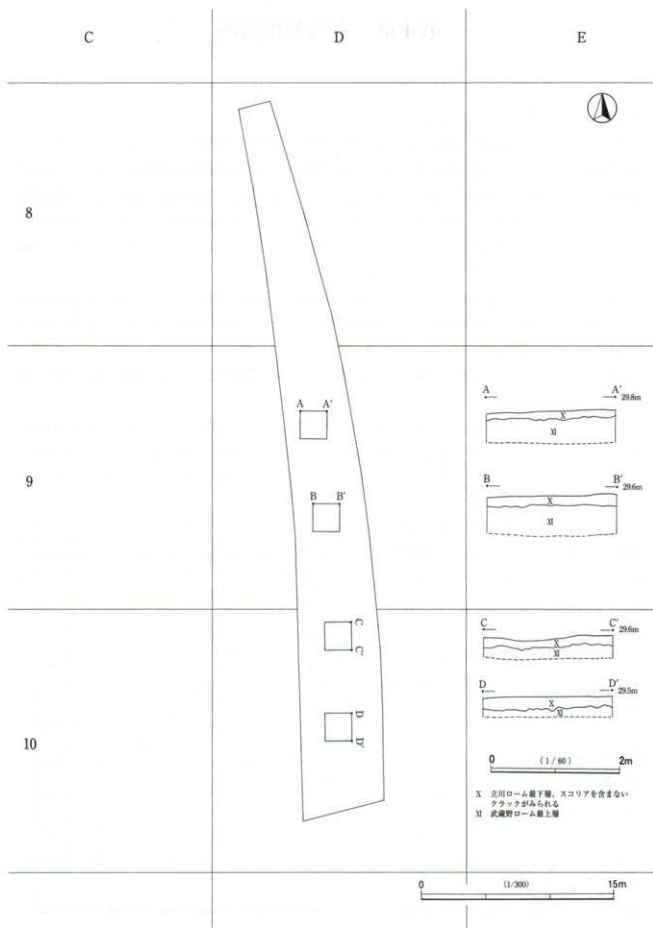
#### 第1節 調査の概要（第17図、図版10）

調査地点は六崎貴船台遺跡の北西側、平成15年度調査地点の約65m南側に位置する。県道佐倉印西線の車道部西側に沿った幅約2.6m～6.5m、長さ約55mの範囲で、標高は29.6m～30.0mである。佐倉市教育委員会で登録している調査回数では第13次にあたる。上層の確認調査は行わず、全面表土除去したところ、表土下約5cm～20cmにハードローム層を検出した。遺構・遺物とも検出されなかったため本調査は実施しなかった。

下層については、2m×2mのグリッドを4か所設定して確認調査を行った。10cm～20cm掘り下げたところ、武蔵野ローム層（XI層）に達し、対象地全域が立川ローム層最下層まで削平されていることが判明し、遺物は検出されなかったため本調査は実施しなかった。

調査にあたっては、第2章で記したとおり遺跡範囲にかかる事業地を旧公座標に基づく方眼網で覆い、20m×20mの区画を大グリッドとし、大グリッドの中はさらに4m×4mごとに25個の小グリッドに分割した（第4図）。当該調査地点の範囲はC、D、Eの3列、8、9、10の3行にかかり、範囲内4か所の小グリッドの北西隅に基準点を打設し、実測などに使用した。

地元住民によれば、調査地点付近はかつて「ヤマ」で、地表面は現在より高い位置にあったとのことである。調査地点の南に市道を挟んで小高い土地が隣接しており、その崖面を観察したところ、表土下30cm～40cmでソフトローム層がみられた。この場所の地表面の標高は約31.5m～32.0mであることから調査地点付近は1.5m程度削平されたとみられ、遺跡の本来の地形は南西側に向かって高くなっていただと考えられる。



第17図 六崎貴船台遺跡（平成17年度調査地点）下層確認グリッド配置・土層断面図



## 第4章 六崎外出遺跡

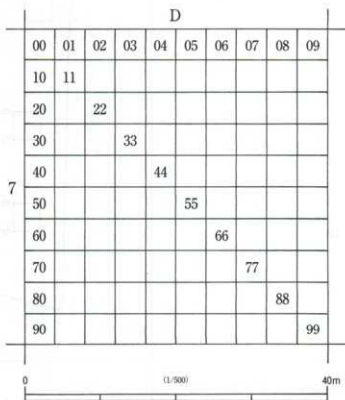
### 第1節 調査の概要 (第18～20図、図版11・12)

調査地点は六崎外出遺跡の南端に位置する。県道佐倉印西線の車道部西側に沿った幅約6m～7m、長さ約76mと西側に4mほどの道路取り付け部2か所の範囲で、現表土面の標高は29m強であった。佐倉市教育委員会で登録している調査回数では第14次にあたり、平成15年度に佐倉市教育委員会により確認調査が行われた第7次調査地点の東側に隣接している。上層確認調査は調査範囲に沿ったトレンチを2か所設定し、中世の掘立柱建物跡などを検出した。また、南側に設定したトレンチでは近年削平されたことが確認され、削平箇所を除いた300mについて本調査を行った。

検出された上層の遺構は、縄文時代の炉穴3基、古墳時代の道路状遺構1条、中世の掘立柱建物跡5棟、ピット10数基を検出したが、幅が狭く細長い調査区であったため、部分的な調査に留まった遺構がほとんどである。

下層については、2m×2mのグリッドを4か所設定して確認調査を行ったが、遺物が出土しなかったため本調査は実施しなかった。

調査にあたっては、遺跡範囲にかかる事業地を旧公共座標に基づく方眼網で覆い、40m×40mの区画を大グリッドとし、大グリッドの呼称法は、基点を0Aとし、南へは算用数字、東へはアルファベットを付し、これを組み合わせて大グリッド名とした。大グリッドの中はさらに4m×4mごとに100個の小グリッドに分割し、北西隅を基点に東へ00、01、02……09まで、一行南は10、11、12……19と進み、南東隅を99とした。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、7D-55のように表示した(第18図)。調査範囲はC、D、Eの3列、7、8の2行にかかり、範囲内10か所に小グリッドの北西隅に基準点を打設し、遺構実測などに使用した。



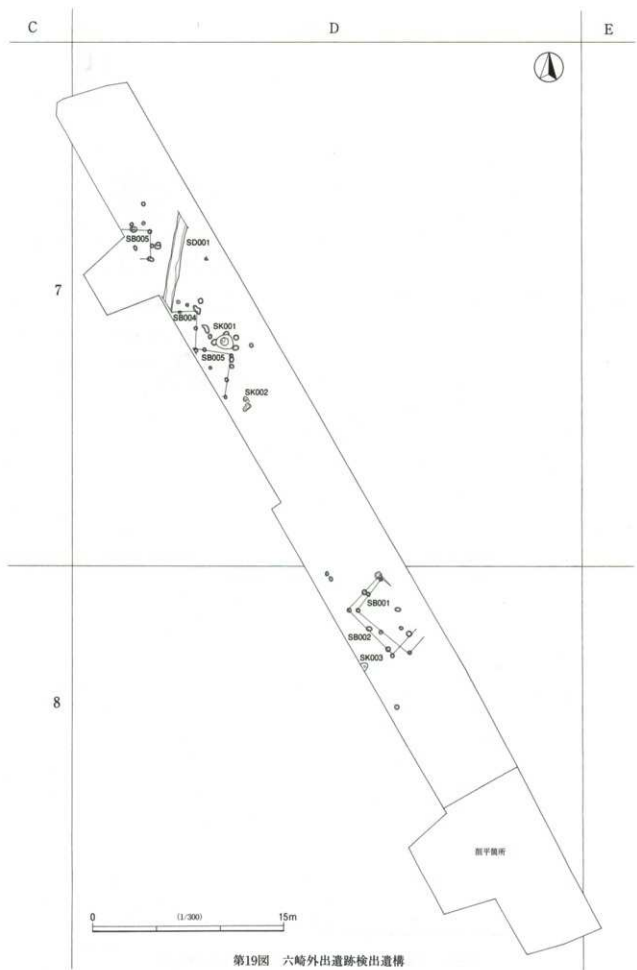
第18図 グリッド名称例

### 第2節 縄文時代

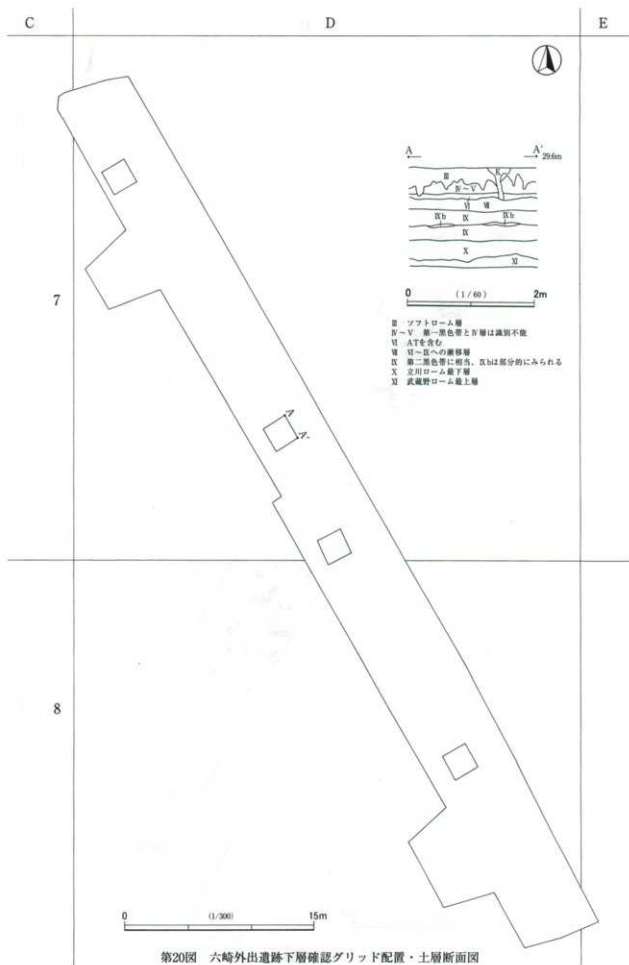
#### 1 炉穴

##### SK001 (第21図、図版12)

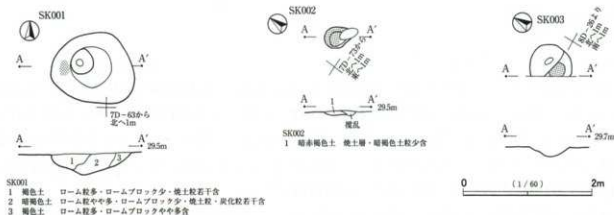
調査区北側、7D-52・53に位置する。不整な円形を呈する。長軸径1.3m、短軸径1.05m、断面形は中央付近が最も深く、深さ最大32cmを測る。火床は西側に位置する。楕円形を呈し、長軸径約20cm、短軸径



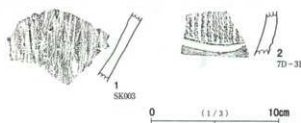
第19図 六崎外出道跡検出遺構



第20図 六崎外出遺跡下層確認グリッド配置・土層断面図



第21図 SK001・SK002・SK003



第22図 出土土器

15cmを測る。中央付近は焼土粒・炭化粒を含む暗褐色土、火床上は焼土粒を若干含む褐色土が堆積していた。遺物は土器片3点が出土したが、小片のため図示しなかった。

SK002 (第21図、図版12)

調査区中央、7D-63に位置する。ほぼ火床部分のみが遺存していたものである。南東側は一部攪乱されている。不整形を呈し、長軸径推定約45cm、短軸径35cm、深さ7cm～8cmを測る。覆土は焼土層であった。遺物は出土しなかった。

SK003 (第21・22図、図版12・13)

調査区南側、8D-15に位置する。南東側は調査区外に及んでいる。不整形を呈し、径約65cm、深さ16cmを測る。火床は南側に位置し、径約25cmを測る。北側はテラス状に狭い平坦面が形成されている。覆土はローム粒・ロームブロックを少量含む暗褐色土を主体とする。火床面上は焼土が厚さ5cmほど堆積していた。

遺物は早期の無文土器が1点出土した(第22図1)。底部付近とみられる。外面は縦方向の調整痕がみられる。厚さは7mm～8mmで、胎土中に繊維を含む。

2 遺構外出土土器(第22図、図版13)

遺構外から出土した縄文土器は1点のみであった。2は調査区北部7D-31から出土した中期の連弧文系土器の胴部片である。地文は撚糸文で、沈線による文様が施される。

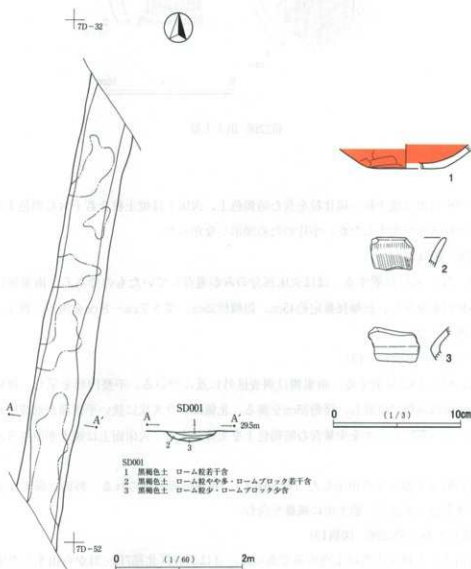
### 第3節 古墳時代

#### 1 道路状遺構

SD001 (第23図、図版12・13)

調査区北側、7D-31・32・41・42・51に位置する。南北方向に走る浅い道路状遺構である。西側に隣接する第7次調査地点において検出された本跡に連続すると思われる溝状遺構は中世の所産と報告されているが、覆土中及び底面より古墳時代の土師器が出土し、硬化面が認められたことから古墳時代の道路状遺構と判断した。検出したのは長さ約7.4mで、幅75cm～90cm、深さ約20cmを測る。底面は平坦ではなく、側面との境は明瞭でない。一点鎖線で囲んだ範囲は硬化面である。

遺物は古墳時代前期から中期の土師器が40数点出土した。1は杯の体部から底部片で、底部は平底である。外面はヘラナデ、内面はヨコナデが施される。内外面とも赤彩が施される。胎土色はにぶい橙色である。底径5.8cmを測る。2は甕の口縁部で、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施される。器表面はにぶい黄橙色を呈する。3は甕の口縁部付近の破片で、口縁部から胴部にかけて「く」の字状に屈曲するものである。内外面ともナデ調整が施される。器表面はにぶい黄橙色を呈する。



第23図 SD001

## 第4節 中世

### 1 掘立柱建物跡

5棟の掘立柱建物跡を検出した。そのほかに柱穴の掘り方と思われるピットを多数検出し、実際には5棟以上の掘立柱建物跡が存在したと思われる。いずれも遺物を伴わなかったが、周辺の調査例から中世の所産と判断した。

#### SB001 (第24図、図版11)

調査区南側、8D-05・15・16に位置する。SB002と重複するが新旧関係は不明である。北東側は調査区外に及んでいるが、桁行2間(5.2m)、梁行2間(3.0m)の側柱式の建物であったと考えられる。主軸方位はN-50°-Wを指す。桁行の柱間寸法は2.4m~2.8m、梁行の柱間寸法は70cmである。柱穴の掘り方は概ね円形を呈するもので、径23cm~30cm、深さ6cm~10cmを測る。断面形は浅い逆台形状を呈する。遺物は出土しなかった。

#### SB002 (第24図、図版11)

調査区南側、8D-05・15・16に位置する。SB001の西側に位置するが新旧関係は不明である。北東側は調査区外に及んでいるが、桁行2間(4.9m)、梁行2間(3.4m)の側柱式の建物であったと考えられる。主軸方位はN-45°-Wを指す。桁行の柱間寸法は2.2m~2.7m、梁行の柱間寸法は1.6m~2.0mである。柱穴の掘り方は概ね円形を呈し、径30cm~50cm、深さ8cm~10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### SB003 (第25図、図版12)

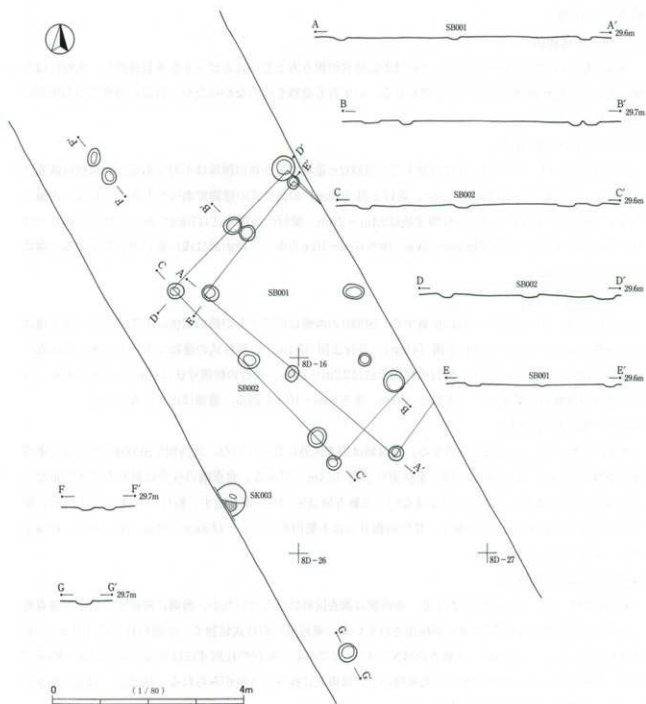
調査区北側、7D-52・62に位置する。南西側は調査区外に及んでいた。北西側でSB004に接する。東西棟の側柱式建物で、桁行推定2間、東側梁行2間(3.3m)である。北東隅の柱穴は掘り方が2穴重なっているが、南側は本跡に伴うものではない。主軸方位はN-10°-Eを指す。桁行の柱間寸法は2.1m、梁行の柱間寸法は1.3m~1.9mを測る。柱穴の掘り方は不整形円形を呈し、径20cm~30cm、深さ8cm~10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### SB004 (第25図、図版12)

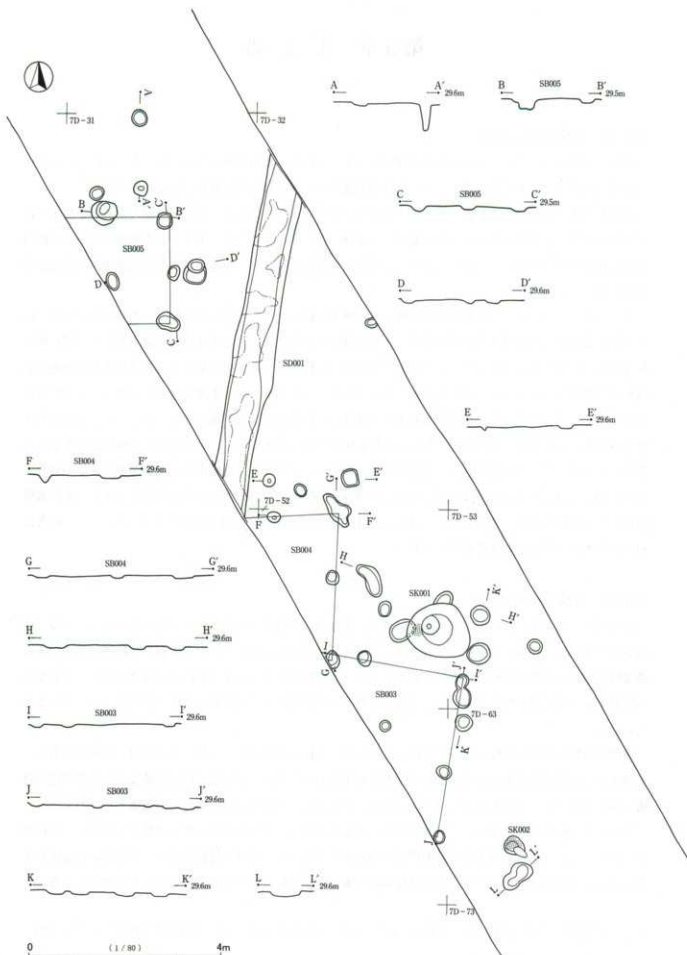
調査区北側、7D-51・52に位置する。南西側は調査区外に及んでいたが、西側に隣接する第7次調査地点において北側桁行の東側の2穴が検出されている。東西棟の側柱式建物で、北側桁行3間(3.0m)、東側梁行2間(2.9m)である。主軸方位はN-4°-Wである。桁行の柱間寸法は70cm、梁行65cm~85cmである。柱穴の掘り方は不整形円形で、北東隅の1穴は南北に抜き取り痕がみられる。径22cm~43cm、深さ8cm~10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### SB005 (第25図、図版12)

調査区北側、7D-30・31に位置する。南西側は調査区外に及んでいた。東西棟の側柱式建物で、桁行推定3間、東側梁行2間(3.1m)である。主軸方位はN-0°である。柱間寸法は2.0m~2.2mを測る。柱穴の掘り方は不整形円形を呈し、深さ8cm~20cmを測る。遺物は出土しなかった。



第24図 南側の遺構群



第25図 北側の遺構群



## 第5章 まとめ

### 第1節 六崎貴船台遺跡

遺構・遺物が検出されたのは遺跡の西側に位置する平成15年度調査地点のみであった。検出された遺構の時代・内容は、第1章第2節3で述べた既調査地点からみた分布域に概ね合致するものであった。

縄文時代は、中期加曾利EⅢ～IV式の土坑2基、陥穴2基を検出した。従来同時期の土坑群が検出されていた第2次・第10次調査地点より、北側への範囲の広がりが確認され、第4・5次調査地点では該期の遺構が検出されていないことから考えると、現時点では加曾利EⅢ～IV式の遺構群は台地南西縁辺部が分布域と想定される。

中・近世については、掘立柱建物跡2棟・台地整形区画3か所・土坑（方形竪穴・火葬施設を含む）12基・溝状遺構8条・欄列1条を検出した。本調査地点の西側に隣接する第4次調査地点I区・II区は掘立柱建物跡・台地整形区画・土坑・井戸などの存在から居住域、さらに東の第5次調査地点は多数の地下式坑や火葬施設などの存在から埋葬施設域であったと考えられている<sup>1)</sup>。本調査地点からは井戸は検出されなかったが、そのほかは第4次調査地点I区・II区とはほぼ同種の遺構が検出されている。特に台地整形区画SX002は、第4次調査地点II区の1号台地整形区画と同一遺構であり、東西方向の長軸長25mを測る大型のものであることが確認された。遺構群の存続期間については、各遺構出土の遺物が少ないため判然としないが、第4次・第5次調査地点と同様に14世紀後半～15世紀前半代が中心と考えられる。溝状遺構SD002は現佐倉印西線と長軸方向が一致し、出土遺物が17世紀後半以降の所産であることから、「佐倉街道」に関連する遺構の可能性が考えられる。

### 第2節 六崎外出遺跡

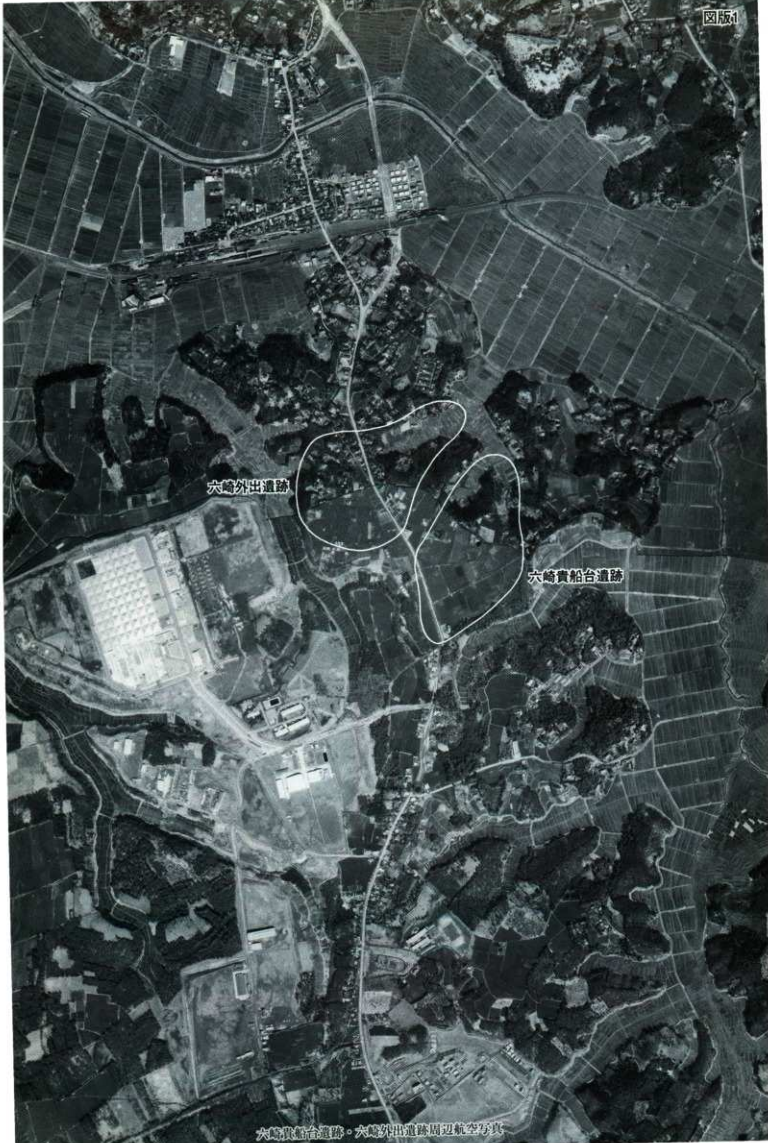
調査地点（第14次）は遺跡の南東端に位置し、南側は六崎貴船台遺跡と画する弱い谷が迫っている。検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴3基、古墳時代の道路状遺構1条、中世の掘立柱建物跡5棟である。縄文時代早期の遺構は本遺跡において初出である。北方に位置する第4・15次調査地点において少量ながら早期条痕文土器が出土しており、遺跡南東側台地縁辺部を中心に該期の遺構が展開しているものと考えられる。

道路状遺構SD001は隣接する第7次地点において、中世の溝状遺構とされたものと同一の遺構である。本調査区では古墳時代前期から中期の土師器片が比較的多く出土し、周辺には住居跡などの古墳時代の遺構は検出されておらず流れ込みとは考えられないことから、現時点では古墳時代の遺構としておく。

中世の掘立柱建物跡は中央に空白域を挟み、梁と桁の方向が異なる南北の2つの群に分かれる。遺物が全く出土していないため時期及び新旧関係の検討ができないが、北側の建物跡群は、六崎貴船台遺跡第4次地点I区で検出された5・6号掘立柱建物跡と規模及び主軸方位が近似していることを指摘できる。

注1 渋谷芳則・小牧美知枝「六崎貴船台（第4・5次）遺跡発掘調査報告書」印旛郡市文化財センター 1995

写 真 图 版



六崎外出遺跡

六崎實船台遺跡

六崎實船台遺跡・六崎外出遺跡周辺航空写真



I区調査前



II区調査前



I区調査風景



II区調査風景



I区下層確認  
グリッド



II区下層確認  
グリッド



III区下層確認  
グリッド



III-①区下層確認  
グリッド上層断面





I-①区



I-②区



I-③区



II-①区



III-②区



III-③区



SB001  
SA001



SB001  
SA001



SB002



SB002  
主層断面



SX001



SX003



SK001



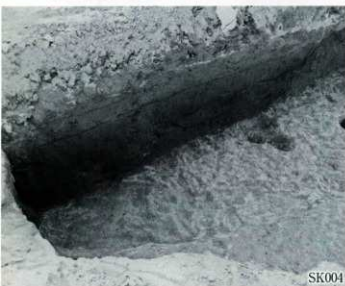
SK001  
主層断面



SK002



SK003



SK004



SK005  
SK006



SX002  
SK007



SK007  
主層断面



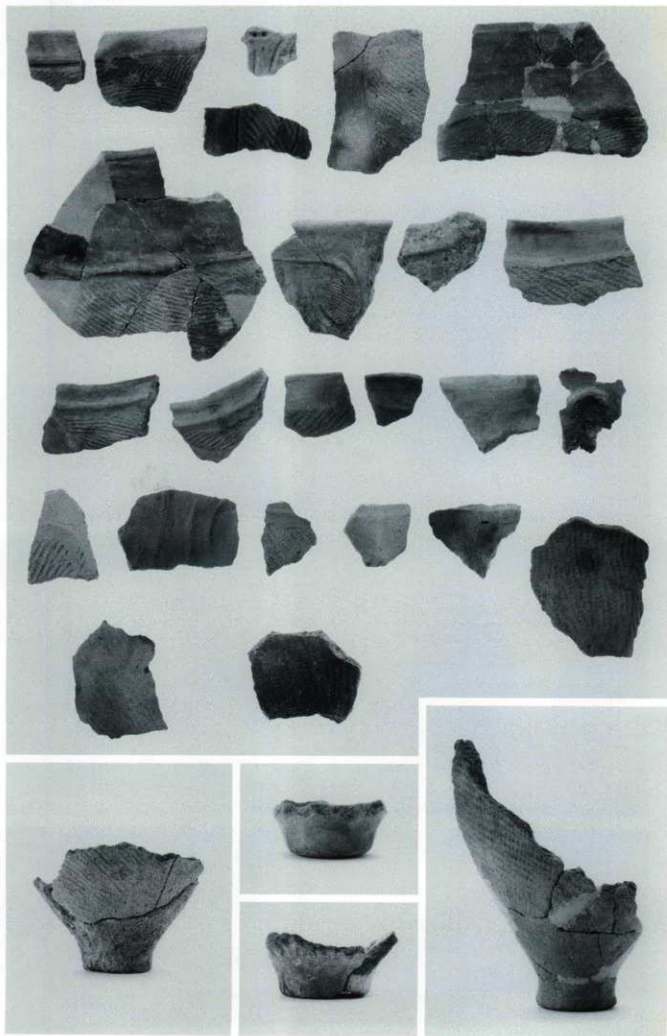
SK008  
SK009



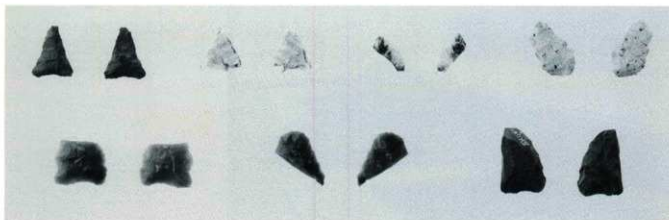
SK010







SK001出土土器



SK001出土石器



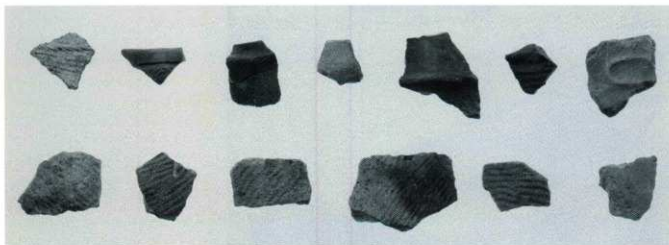
SK010出土土器



SK010出土石器



SK015出土土器



遺構外出土縄文土器



中・近世土器・瓦・陶器



中世銭貨



調査区北側



調査区南側



下層確認クワッド  
SPA-A'



下層確認クワッド  
SPD-D'





南側の遺構群



北側の遺構群





SB003



SE004



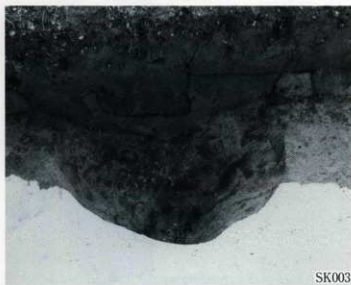
SB005



SK001



SK002



SK003



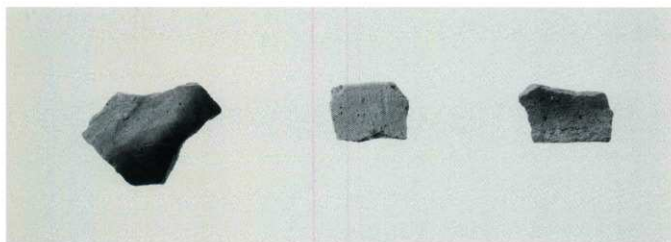
SD001



TW001



縄文土器



古墳時代土師器

## 報告書抄録

ふりがな	さくらいんざいせん (しゃかいしほんせいびそうごうこうふきん) まいぞうふんかざいちょうさほうこくしょ
書名	佐倉印西線 (社会資本整備総合交付金) 埋蔵文化財調査報告書
副書名	佐倉市六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡
巻次	4
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第662集
編著者名	木原高弘
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦2011年3月18日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
六崎貴船台遺跡	佐倉市石川字春地 290-4、290-5、 290-7、290-8、 296-1ほか	12212	046	35度 14分 49秒	140度 14分 08秒	20031001～ 20031024 20060705～ 20060713	450  271	佐倉印西線の社会資本整備総合交付金(交通安全)事業に伴う埋蔵文化財調査
六崎外出遺跡	佐倉市六崎字外出 1047-1Aほか	12212	047	35度 14分 58秒	140度 14分 04秒	20080602～ 20060610	375	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六崎貴船台遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 中・近世	土坑2基 陥穴2基 掘立柱建物跡2棟 台地整形区画3か所 土坑12基 溝状遺構8条 欄列1条	縄文土器 石器 土器 陶器 瓦 銭貨	
六崎外出遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代 中世	炉穴3基 道路状遺構1条 掘立柱建物跡5棟	縄文土器 土師器	縄文時代早期の遺構は本遺跡において初出である。

要約	六崎貴船台遺跡・六崎外出遺跡は、ともに縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡である。六崎貴船台遺跡の調査地点は遺跡の南西側に位置し、縄文時代中期の土坑・陥穴、中・近世の遺構群が検出された。六崎外出遺跡の調査地点は遺跡の南東側に位置し、縄文時代早期の炉穴と中世の掘立柱建物跡群が検出された。
----	--



千葉県教育振興財団調査報告第662集

佐倉印西線（社会資本整備総合交付金）

埋蔵文化財調査報告書 4

— 佐倉市六崎貫船台遺跡・六崎外出遺跡 —

---

---

平成23年3月18日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発 行 千 葉 県 県 土 整 備 部  
千葉県中央区市場町1-1

財団法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社  
千葉県中央区都町1-10-6

---

---